

次世代への住生活文化の継承と住教育に関する研究 その2 高校生世代における伝統的住生活文化の継承実態

A study on housing cultural succession and housing education: Part2
The inheritance of traditional housing culture
among high school students

鈴木 佐代

Sayo SUZUKI
家政教育研究ユニット

有友 里沙

Risa ARITOMO
元福岡教育大学大学院

古田 慧

Akira FURUTA
元福岡教育大学大学院

豊増 美喜

Miki TOYOMASU
大分大学客員研究員

(令和6年9月30日受付, 令和6年12月23日受理)

抄録

今日, 日本の気候風土に根ざした伝統的な住まいのつくりや生活の知恵が失われつつあり, 日本の住文化を家庭内で子どもたちに継承していくことが難しくなっている。一方, 学校教育では, 日本の伝統や文化に関する教育が重視され, 家庭科においても生活文化の理解や継承, 創造に関する学習活動の充実が求められている。本研究は, 次世代への住生活文化の継承とそのための住教育の充実を目的とし, 本論文では, 日本の伝統的な住生活と日本家屋の知識が高校生世代にどの程度継承されているか実態把握を行った。その結果, 現代の住宅からなくなりつつある部位の知識やそれにまつわる伝統的な生活の経験は生徒間の差が大きいこと, 伝統的な住生活の経験には, 自宅の和室形態に加えて, 祖父母等の高齢親族からの伝承機会が影響していること, また, 伝統的な住生活の経験が多い生徒ほど日本家屋に関する知識があることが明らかとなった。さらに, 伝統的な住生活の経験が多い生徒や, 歴史的なまち並みに住んでいる, または日常的に訪問するという生徒は, 伝統的な建物やまち並みに対して興味関心があり, 将来に残したいと思う割合が高いことも示された。

キーワード: 伝統文化 住教育 高校生 和室 生活経験 語句

I. はじめに

今日, 日本の気候風土に根ざした伝統的な生活文化が失われつつあり, 家庭内で祖父母や親の世代から子どもたちに継承していくことも難しくなっている。しかし, 引き戸の建具による空間や

環境の調整, 床座の生活様式, 手入れをして長く使う生活習慣, 日常生活の美意識などに表される日本の住まいの文化は, 自然環境との親和性, 環境負荷の低減, 家族に合わせた柔軟な住まい方, 地域の居住文化の継承など, 持続可能な社会の実

現に向けて、現在や将来の住まいや暮らしのありように重要な示唆を与えるものである。次世代を担う子どもたちに住まいの伝統や文化を継承していくことは、現代生活の見直しや、将来の持続可能な生活について考えることにつながり、その意義は大きいと言える。

一方、近年、日本の住まいや建築の文化を再評価し継承していこうとする動きがみられ^{1~3)}、学校教育では、さまざまな教科において日本の伝統や文化に関する教育が重視される傾向にある。家庭科では生活文化の理解や継承、創造に関する学習活動の充実が求められている^{4~6)}。高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説家庭編⁶⁾の「家庭基礎」では「B衣食住の生活の自立と設計」に「日本と世界の衣食住に関わる文化についても触れること。その際、日本の伝統的な和食、和服及び和室などを取り上げ、生活文化の継承・創造の重要性に気付くことができるよう留意すること。」とあり、住生活に関しては「例えば、床の間や畳、縁側、土間等の日本建築・家屋の構法や構造等に触れ、気候や風土に応じた各地域の家づくりと住まい方の特徴や変遷について指導することなどが考えられる。」と記述されている。また「家庭総合」の「(3) 住生活の科学と文化」には、「住生活を取り巻く課題、日本と世界の住文化など、住まいと人との関わりについて理解を深めること。」とあり、「日本と世界の住文化については、(中略) 日本の伝統的な生活文化である和室や日本建築・家屋等についても触れる。」と記載されている。

本研究は、次世代への住生活文化の継承とそのための住教育の充実をめざし、本論文では、高校生世代に伝統的な暮らしや日本家屋の知識がどの程度継承されているかを明らかにする。加えて、それらと高校生を取り巻く環境（住宅の和室形態や祖父母等からの伝承機会など）との関係を考察する。なお、前報では福岡県K市の中学生を対象に伝統的な住生活の経験や日本家屋に関する知識等の実態を把握している⁷⁾。

本研究と同様に住教育の充実を目的として、住まいの伝統や文化の経験・知識の実態把握を行った研究には、大阪府八尾市の小学生の保護者を対象にした奥田・碓田らの研究⁸⁾、香川県の中学生と大学生を対象にした妹尾の研究⁹⁾、島根県の小学生および関東地方、近畿地方、中四国地方の大学生を対象にした正岡らの研究¹⁰⁾があるが、高校生世代を対象とした研究は行われていない。

Ⅱ. 調査概要

福岡県内の公立高等学校1校の1年生^{注1)}を対象に、2020年1月にアンケート調査を実施した。在籍者数156人に対し154人(98.7%)から回答を得た。

調査内容は、日本の伝統的な住生活の経験、日本家屋に関する知識、伝統的な建物やまち並みに対する意識、自宅の和室形態、祖父母等の高齢親族からの伝承機会、歴史的なまち並みの訪問経験等である。

アンケート調査は無記名で行い、調査票に住教育の研究のために使用することを記載した。調査票の配布・回収作業は対象校の家庭科教員が行った。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 日本の住生活文化に触れる機会

(1) 自宅の和室形態

対象者の自宅の和室形態は、「和室1室」が51.9%を占め、最も多い(表1)。「和室なし」は14.9%みられる。伝統的な住まいに見られる「続き間」、「複数和室」は、それぞれ13.0%、18.2%あり、前報⁷⁾の調査対象であるK市の中学生の住宅より多い。

表1 和室形態

	人	%
続き間	20	13.0
複数和室	28	18.2
和室1室	80	51.9
和室なし	23	14.9
その他	2	1.3
不明	1	0.6
総計	154	100.0

(2) 祖父母等からの昔の住まいと暮らしの伝承機会

祖父母等の高齢親族からの伝承機会(昔の住まいや暮らしを体験させてもらったり話を聞かせてもらったりすることがあるか)については、「よくある」(9.7%)と「時々ある」(29.9%)の合計が4割弱を占める一方で、「あまりない」(37.7%)、「まったくない」(22.1%)を合わせると6割を占める(表2)。

表2 祖父母等からの住まいと暮らしの伝承機会

	人	%
よくある	15	9.7%
時々ある	46	29.9%
あまりない	58	37.7%
まったくない	34	22.1%
不明	1	0.6%
総計	154	100.0%

表3 歴史的なまち並みの訪問経験

	人	%
住んでいる・住んだことがある	4	2.6
日常的に行く・行ったことがある	48	31.2
観光・旅行で行ったことがある	55	35.7
修学旅行・社会見学などで行った	97	63.0
テレビやインターネット、書籍などで写真を見たことがある	95	61.7
行ったことも見たこともない	2	1.3
その他	0	0.0

(複数回答, n=154について)

(3) 歴史的なまち並みの訪問経験

調査対象校は福岡県の郊外地域にあり、学校と同じ市内に重要伝統的建造物群保存地区がある。地域に残る伝統家屋や歴史的なまち並みに住んでいる、または訪問したことがある生徒がいることが予想されたため、歴史的なまち並みの訪問経験を調査した。なお調査では、同市内の重要伝統的建造物群保存地区への訪問経験に限定せず、「(写真を見せて)このような日本の歴史的なまち並みを訪れたことがありますか」と質問した。その結果、「住んでいる・住んだことがある」が4人(2.6%),「日常的に行く・行ったことがある」が48人(31.2%)であった(表3)。また、6割の生徒は「修学旅行・社会見学などで行った」(63.0%),「テレビ、インターネット、書籍等の写真でみた」(61.7%)を選択しており、学校の行事や映像も記憶に残っていると言える。

表3の回答は複数回答であるため、生徒一人一人にとってのまち並み体験の程度がわからない。そこで表3の回答をもとに、歴史的なまち並みの体験は、居住>日常的に訪問>旅行等で訪問(修学旅行等含む)>映像でしか見たことがない>経験なし(訪問したことも映像で見たこともない)、の順に体験の程度が高いとみなして、順位の高い方の回答を基準に生徒を5段階に分類した(表4)。その結果、「居住」が4名(2.6%),「日常的に訪問」が44人(28.6%),「旅行等で訪問」が87人(56.5%),「映像でしか見たことがない」が16人(10.4%),「経験なし」が2名(1.3%)となった。歴史的なまち並み地区が学校と同じ市内にあっても「旅行等で訪問」が最も多い。実在するまち並みを訪問したことがなく映像でしか見たことがない生徒も1割を占める。

表4 歴史的なまち並みの体験の程度

	人	%
居住	4	2.6
日常的に訪問	44	28.6
旅行等で訪問	87	56.5
映像でしか見たことがない	16	10.4
経験なし	2	1.3
不明	1	0.6
総計	154	100.0

2. 伝統的な住生活の経験

(1) 伝統的な住まい方の経験

日本の伝統的な住まい方として9項目を選び、その経験の有無を調査した(表5)。住まい方の経験は、自宅の和室形態や祖父母等からの伝承機会との関連が予想されることから、表5では自宅の和室形態別、さらに祖父母等からの伝承機会別の経験率も示している。なお、祖父母等からの伝承機会別、表2の「よくある」と「時々ある」を「伝承有」、「あまりない」と「まったくない」を「伝承無」としたものである。

まず、全体の経験率(経験があると回答した生徒の割合)をみると「畳に座る」「畳にねころがる」など畳に関する生活の経験率はほぼ100%である。これに対して「朝、布団を押し入れにしまう」「障子やふすまを外す」「季節によって敷物をかえる」の経験率は各々61.0%、51.3%、46.8%であり、畳に関する生活の経験率より低くなる。また、「打ち水をして涼しくする」「季節によって飾り物をかえる」「すだれをかけて日よけをする」「縁側に腰かける」の経験率は約3割である。高

表5 伝統的な住まい方の経験（和室形態および祖父母等からの伝承機会別）

	続き間 n=20	伝承有(8)	複数と和室 n=28	伝承有(11)	和室1室 n=80	伝承有(32)	和室なし n=23	伝承有(9)	全体* n=154	伝承有(60)
		無(12)		無(17)		無(47)		無(14)		無(90)
畳に座る	100.0	100.0	100.0	100.0	98.8	96.9	100.0	100.0	99.4	98.3
		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0
畳にねころがる	100.0	100.0	100.0	100.0	96.3	100.0	91.3	100.0	96.8	100.0
		100.0		100.0		95.7		85.7		95.6
朝、布団を押入にしま う	55.0	75.0	57.1	72.7	60.0	84.4	78.3	100.0	61.0	83.3
		41.7		47.1		44.7		64.3		47.8
障子やふすまを外す	55.0	75.0	64.3	90.9	47.5	59.4	47.8	77.8	51.3	70.0
		41.7		47.1		40.4		28.6		40.0
季節によって敷物をか える	55.0	50.0	50.0	45.5	47.5	53.1	39.1	66.7	46.8	53.3
		58.3		52.9		44.7		21.4		44.4
打ち水をして涼しくす る	35.0	62.5	39.3	63.6	26.3	43.8	39.1	33.3	32.5	48.3
		16.7		23.5		17.0		42.9		22.2
季節によって飾り物を かえる	40.0	62.5	25.0	45.5	33.8	43.8	30.4	55.6	31.8	48.3
		25.0		11.8		27.7		14.3		22.2
すだれをかけて日よけ をする	25.0	37.5	42.9	45.5	30.0	53.1	21.7	22.2	29.9	45.0
		16.7		41.2		14.9		21.4		21.1
縁側にこしかける	50.0	100.0	42.9	63.6	21.3	34.4	21.7	44.4	28.6	50.0
		16.7		29.4		12.8		7.1		15.6
どれも経験したことが ない	5.0	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	1.7
		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0

注) 色分けは経験率の区分を示す

*全体には、和室形態「その他・不明」の回答、
伝承機会「不明」の回答を含む

経験率	25%未満	25~50%未満	50~75%未満	75%以上
-----	-------	----------	----------	-------

校生世代が暮らす住宅から障子やふすま、縁側、押し入れといった部位や場所がなくなりつつあること、四季の変化への対応のしかたが変化していることが読み取れる。

次に和室形態別に住まい方の経験率を比較する。経験率が50%以上の項目数は、「続き間」では6項目、「複数と和室」では5項目あるのに対し、「和室1室」と「和室なし」は3項目である。さらに祖父母等からの伝承機会別にみると、ほとんどの項目において「伝承有」の方が「伝承無」よりも経験率が高い。例えば、「障子やふすまを外す」の経験率は、「複数と和室」で「伝承有」の場合は90.9%と高いが、同じ「複数と和室」でも「伝承無」の場合は47.1%と低い。これより伝統的な住まい方を経験しているか否かは、住宅の物理的な状況（和室形態）に加えて、高齢世代からの暮らしの伝承が重要な役割を果たしていると言える。また、「障子やふすまを外す」の経験率は、「和室なし」であっても「伝承有」の場合は77.8%と高い。高校生の祖父母世代にはまだ伝統的な住宅や暮らしが残っており、自宅に和室がない場合でも、祖父母等との接触を通して昔ながら

の暮らしを経験できる環境にある生徒もいる。

(2) 伝統的な住まいの維持管理の経験

昔ながらの住まいの維持管理行為として5項目を選び、その経験の有無を調査した（表6）。表5の住まい方と同様に自宅の和室形態別、祖父母等からの伝承機会別の経験率も示している。

表6に示す5項目のうち「玄関先や庭をほうきで掃く」の経験率は85.7%と高いが、それ以外の「障子やふすまの張替えや破れの修理」「ほうきで畳の部屋の掃除」「はたきでほこりを落とす」「畳をあげて掃除する」の経験率は1~4割程度である。また「どれも経験なし」という生徒が11.0%を占める。掃除の道具や方法が変化し、高校生世代に継承されていないことが窺える。

次に住まいの維持管理の経験率を和室形態別、祖父母等からの伝承機会別にみる。「障子やふすまの張替えや破れの修理」の経験率は、「続き間」「複数と和室」「和室1室」「和室なし」の順に60.0%、42.9%、36.3%、21.7%と低くなり、和室形態による違いが大きい。一方、「はたきでほこりを落とす」の経験率は、和室形態による違いが

表6 伝統的な住まいの維持管理の経験（和室形態および祖父母等からの伝承機会別）

	続き間 n=20	伝承有(8)	複数和室 n=28	伝承有(11)	和室1室 n=80	伝承有(32)	和室なし n=23	伝承有(9)	全体* n=154	伝承有(60)
		無(12)		無(17)		無(47)		無(14)		無(90)
玄関先や庭をほうきで はく	80.0	100.0	92.9	90.9	85.0	96.9	87.0	88.9	85.7	95.0
		66.7		94.1		78.7		85.7		81.1
障子やふすまの張替え や破れを修理する	60.0	75.0	42.9	63.6	36.3	50.0	21.7	11.1	38.3	50.0
		50.0		29.4		27.7		28.6		31.1
ほうきを使って畳の部 屋の掃除をする	45.0	75.0	42.9	54.5	30.0	37.5	34.8	55.6	35.1	48.3
		25.0		35.3		25.5		21.4		26.7
はたきでほこりを落と す	30.0	50.0	32.1	54.5	30.0	50.0	26.1	33.3	29.9	48.3
		16.7		17.6		17.0		21.4		17.8
畳をあげて掃除をする	10.0	12.5	28.6	54.5	11.3	21.9	4.3	11.1	13.0	25.0
		8.3		11.8		4.3		0.0		5.6
どれも経験したことが ない	10.0	0.0	7.1	9.1	12.5	3.1	13.0	0.0	11.0	3.3
		16.7		5.9		19.1		21.4		16.7

注) 色分けは経験率の区分を示す

経験率	25%未満	25~50%未満	50~75%未満	75%以上
-----	-------	----------	----------	-------

*全体には、和室形態「その他・不明」の回答、
伝承機会「不明」の回答を含む

小さく、「伝承有」と「伝承無」の差が大きい。
はたきを使った掃除の経験は、住宅の物理的な状
況とあまり関係がなく、家族からの伝承機会の影
響を受けると言える。

3. 部位の名称から見た日本家屋の知識

日本家屋に関する知識の程度を把握するため
に、日本家屋に特徴的な部位とその名称を知っ
ているかどうかを調査した。表7に示す13の部
位の名称を見て、日本家屋の室内と外観を撮影
した写真の中から該当する箇所を選ぶ方法によ
り調査した。

各部位の正答率は、正答率8割以上の「畳」
「障子」から正答率2割以下の「棟」「欄間」
「鴨居」まで部位による差が大きい。対象者の
正答率が前報⁷⁾の中学生よりも高いという傾向
は見られないが、正答率の高い部位、低い部
位の傾向には共通する特徴がある。

次に部位の名称の正答率を、伝統的な住生活
の経験数により分けた3群で比較する。住生活
経験の3群とは、表5、6で示した伝統的な住
まい方9項目と維持管理5項目の計14項目の
うち何項目を経験したことがあるかにより対象
者を3グループに分けたものである。今回の対
象者の場合、低位群（経験数2～5）が55人
（36.2%）、中位群（経験数6～8）が55人
（36.2%）、高位群（経験数9～14）が42人
（27.6%）である。なお経験数の区切りは、
分析目的において3群の人数がなるべく均等と
なるよう設定した。

表7 日本家屋に特徴的な部位の名称の正答率（伝統的な住生活の経験別）

	高位群(n=42)	中位群(n=55)	低位群(n=55)	全体(n=154)
畳	100.0%	100.0%	96.4%	98.1%
障子	85.7%	94.5%	85.5%	88.3%
すだれ	90.5%	81.8%	65.5%	77.3%
ふすま	83.3%	81.8%	67.3%	76.6%
雨戸	66.7%	70.9%	60.0%	64.9%
縁側	78.6%	60.0%	43.6%	58.4%
床の間	50.0%	36.4%	32.7%	38.3%
敷居	35.7%	45.5%	20.0%	33.1%
軒	47.6%	27.3%	27.3%	32.5%
格子	31.0%	27.3%	25.5%	27.3%
棟	23.8%	9.1%	7.3%	12.3%
欄間	4.8%	9.1%	3.6%	5.8%
鴨居	2.4%	5.5%	1.8%	3.2%

注) 色分けは経験率の区分を示す

経験率	25%未満	25~50%未満	50~75%未満	75%以上
-----	-------	----------	----------	-------

表7より住生活経験が高位群の生徒は、正
答率75%以上が5部位（畳、障子、すだれ、
ふすま、縁側）あり、中位群は4部位（畳、
障子、すだれ、ふすま）あるが、低位群は2
部位（畳、障子）しかない。住生活経験が多
い生徒ほど部位の名称の知識があると言え
る。とくに高位群と低位群の差が大きい（正
答率に15%以上差がある）のは、「すだれ」
「ふすま」「縁側」「床の間」「敷居」「軒」
「棟」であった。これらの部位の認識や名
称の知識に生活経験の差が表れている。

4. 伝統的な建物やまち並みに対する意識

(1) 伝統文化に対する興味関心と将来に残したいもの

日本のさまざまな伝統文化の中で、対象者の多くが興味関心を持ち、将来に残していきたいと考えているのは「和食」である。「和食」以外の伝統文化への興味関心、将来に残したいと思う意識は全般的に低い（図1）。

伝統的な建物に関しては、「興味関心あり」が33.8%、「将来に残したい」が59.7%で、歴史的なまち並みに関しては、「興味あり」が23.4%

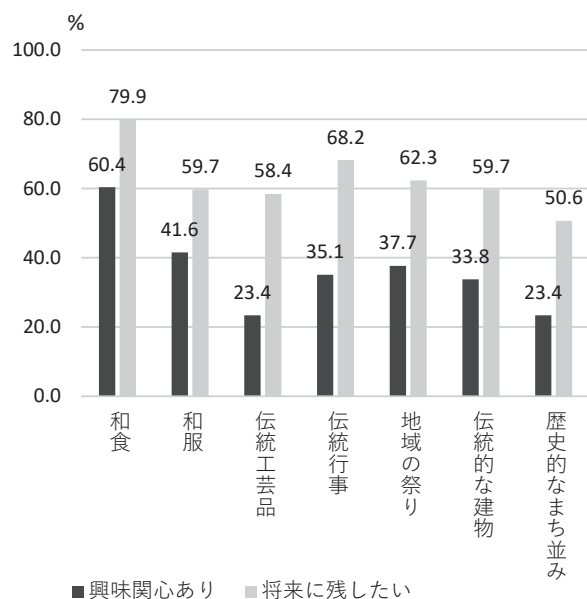


図1 日本の伝統文化に対する興味関心と将来に残したいもの（複数回答，n=154について）

「将来に残したい」が50.6%である。建物，まち並みともに将来に残したいと思う生徒は5割を超えるが興味関心は低い。

(2) 伝統的な建物やまち並みに対する意識と住生活経験

伝統的な建物およびまち並みに対する意識を，住生活経験の3群により比較した（図2）。住生活経験が低位群の生徒は，高位群，中位群に比べて興味関心がある，将来に残したいと思う割合が低い。前報⁷⁾の中学生の結果と同様に，興味関心の有無や将来に残したいと思うか否かに，住生活の経験の程度が影響していることが明らかとなった。生活経験の不足を補い，生徒の意識をいかに高めるかが課題である。

(3) 伝統的な建物やまち並みに対する意識と歴史的なまち並みの訪問経験

伝統的な建物およびまち並みに対する意識と歴史的なまち並みの体験の程度との関係をみたものが図3である。興味関心がある，将来に残したいと思う割合は，歴史的なまち並みに「居住」している生徒，「日常的に訪問」という生徒で高く，「旅行等で訪問」「映像でしか見たことがない」という生徒で低い。伝統的な建物やまち並みの実物に日常的に接触している生徒は，その良さや価値を理解していると考えられる。

IV. まとめ

次世代への住生活文化の継承とそのための住教育の充実をめざして，本論文では，高校生世代への住生活文化の継承実態をアンケート調査により

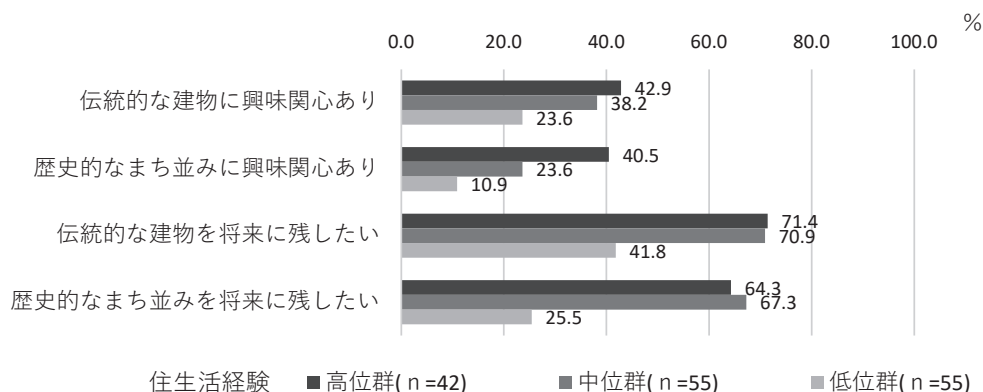


図2 伝統的建物と歴史的なまち並みに対する意識（伝統的な住生活の経験別）（不明を除く n=152 について）

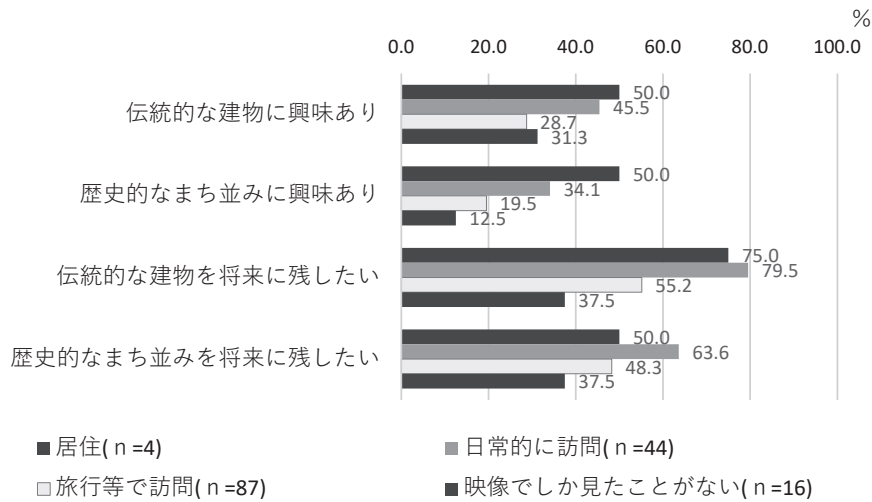


図3 伝統的建物と歴史的まち並みに対する意識（歴史的なまち並みの体験別）
（経験なし2，不明1を除くn=151について）

把握した。結果を以下にまとめる。

1) 高校生が日本の伝統的な住生活文化に触れる機会を、自宅の和室形態、祖父母等からの伝承機会、歴史的なまち並みの訪問経験の3点から考察した。今回の調査対象者の場合、和室形態は「和室1室」、祖父母からの伝承機会「あまりない」、歴史的なまち並みの体験は「旅行等で訪問」の割合が最も多い。一方、自宅に「続き間」があり、歴史的なまち並みを「日常的に訪問」という生徒や、「和室なし」で、伝承機会が「まったくない」、歴史的なまち並みは「映像でしか見たことがない」という生徒もあり、同じ高校に通う生徒であっても住生活文化に触れる機会には差がある。

2) 伝統的な住生活の経験の実態からは、畳以外の建具や縁側などの部位にまつわる生活や、季節に応じた生活が高校生世代に受け継がれていないことが窺える。伝統的な住生活の経験の程度には、自宅の和室形態に加えて、高齢親族からの伝承機会が影響している。伝統的な空間を残すだけでなく、空間と一体となっている暮らし方も伝えていくことが必要である。

3) 日本家屋に特徴的な部位の名称の知識は、部位により差があり、多数の生徒が知っている部位（畳、障子など）、ほとんどの生徒が知らない部位（棟、欄間、鴨居など）、伝統的な住生活の経験の程度により生徒間で差が大きい部位（すだれ、ふすま、縁側、床の間、敷居、軒など）が明らかとなった。現在の住宅からなくなりつつある部位の

名称が継承されにくくなっていると言える。これらの部位の役割や空間的特質、暮らし方などを教材化していくことが必要である。

4) 伝統的な建物やまち並みについて、約半数の生徒は将来に残したいと思っているが、興味関心を持つ生徒は少ない。特に伝統的な住生活経験が少ない生徒や歴史的なまち並みを訪問したことがない生徒ほど、興味関心、将来に残したいという意識が低い。住生活文化に関する経験の不足を補うことができる教材や学習活動の検討が必要である。一方、伝統的な住生活文化に日常的に触れている生徒やすでに興味関心を持っている生徒の好奇心を満たすことも必要である。

5) 前報⁷⁾の中学生の実態と比較して、高校生の伝統的な住生活の経験、日本家屋に関する知識が格段に増えているという傾向は見られないが、伝統的な住生活の経験の有無に住宅の物理的な状況（和室形態）と家族状況（高齢者からの伝承）が関連し、さらに住生活経験の有無が日本家屋の知識や伝統的な建物・まち並みに対する興味関心、将来に残したいという意識に影響を及ぼしている点は、前報⁷⁾の中学生と共通する傾向である。

今後は、得られた知見を住教育の具体的な検討につなげていきたい。また、他地域での調査や高齢世代の調査を加え、住生活文化の変容と継承の全体像を把握することも今後の課題である。

謝辞

アンケート調査に協力してくださった高等学校の皆さまに、記して深謝の意を表します。

補注

- 1) 調査対象の1年生の学科およびクラス数は、生活デザイン科が1クラス、総合ビジネス科が1クラス、普通科が2クラスである。

引用文献

- 1) 国土交通省「和の住まいの推進」
https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/jutakukentiku_house_tk4_000078.html
(参照 2024 年 9 月 20 日)
- 2) 文化庁「無形文化遺産 伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」
https://bunka.nii.ac.jp/special_content/ilink4
(参照 2024 年 9 月 20 日)
- 3) 松村秀一，服部岑生「＜住総研住まい読本＞和室学 世界で日本にしかない空間」平凡社，2020 年
- 4) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 家庭編」
- 5) 文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 技術・家庭編」
- 6) 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 家庭編」
- 7) 鈴木佐代，豊増美喜ほか 3 名「次世代への住生活文化の継承と住教育に関する研究 中学生の住生活文化の知識と経験」福岡教育大学紀要，第 73 号，第 5 分冊，pp.61-68，2024 年 3 月
- 8) 奥田千尋，碓田智子「日本の住文化を伝えるための住教育に関する研究 小学生のいる家庭における伝統的住文化の継承実態と保護者の住意識」平成 22 年度日本建築学会近畿支部研究発表会，pp.701-704，2010 年 5 月
- 9) 妹尾理子「日本の伝統的住まい・建築に関する若者の理解の現状と課題—住教育の充実に向けた基礎調査として—」日本建築学会大会学術講演梗概集（関東），13021，pp.41-42，2015 年 9 月
- 10) 正岡さちほか 4 名「小学生の和室に対する意識をふまえた住生活文化教育のあり方」島根大学教育学部紀要（教育科学），第 55 巻，pp.43-51，2022 年 2 月